

「女性科学者をもっと育てたい」

神戸大学特別顧問
相馬 芳枝 さん (工学博士)

キュリー夫人のノーベル化学賞受賞100年を記念して国際純正・応用化学連合が平成23(2011)年、女性化学者23人に贈った女性化学賞を日本人でただ一人受賞したのが相馬芳枝さん。昭和61(1986)年に猿橋賞受賞後も日本化学会学術賞受賞など、女性化学者の先駆者として一線で活躍されてきました。

現在は母校の神戸大学特別顧問として、後進の女性科学者育成のために女子中高生への働きかけや、女性研究者が研究を続けられる男女共同参画の環境整備に取り組んでいます。



化学との出会い

高校時代は医師を目指していましたが、神戸大学理学部に進学。そこで出会った先生が素晴らしい方で、研究室を開放して1年生にもどんどん実験を手伝わせてくれました。そこで化学の面白さに取りつかれて、この道に進む決意が固まりました。

卒業後は「できるだけ男女平等に働ける環境で」と国立研究所に研究職として就職しましたが、大学院を出ているわけでもないのに早速壁にぶつかりました。そこで研究所の制度を利用して京都大学研究室に国内留学。当時はもう結婚していたのですが、大学の近くにアパートを借りて一人暮らしするぐらい研究に没頭していました。あの期間に研究者としての心構えを叩きこまれたと思います。

研究と家庭の両立

35歳のときカリフォルニア大学に留学して、そこで子供2人を育てながら研究もバリバリこなしている女性教授に師事し衝撃を受けました。それまで漠然と「育児と一流の研究の両立は困難」と刷り込まれていたのが、実はそうじゃないのかも!と。結局40歳で出産しましたが、やはり研究環境の整ったアメリカと違い、日本での育児と研究の両立の難しさは想像していた以上でした。保育園に預けましたが、病弱な子だったので結局は同じ敷地に住んでいた夫のきょうだいの家族が交代で世話をしてくれました。夫が家事でもなんでも上手にこなせる人だったことにも助けられましたね。

プロフィール

神戸大学理学部化学科卒業。通産省大阪工業技術試験所(現産業技術総合研究所)入所。京都大学にて工学博士号取得。カリフォルニア大学博士研究員、フランスCNRS国立研究所客員教授、神戸大学教授等を経て現職。男女共同参画学協会連絡会第3期委員長を務めたほか、日本化学会フェロー、産業技術総合研究所名誉リサーチャー。猿橋賞、工業技術院長賞、科学技術庁長官賞、日本化学会学術賞、世界化学年女性化学賞など受賞多数。

女性科学者を増やしたい

私が研究の世界に入ったころは、女性の理系研究者はまだ珍しい存在でした。そのせいか「女性は能力が低い」と見られる風潮がありました。残念なことに、その風潮はまだまだ残っているように思います。同じ業績を上げても、上に上がるのは男性の方、これはおかしい。でもいくら「おかしい、おかしい」と言っても説得力はないです。ではどうすればいいか?それは「活躍して、業績を残す女性を増やす」しかないと思います。まだまだ男性の世界である科学の分野でも、女性科学者が増えて活躍するようになればもう「女は…」なんて言えませんか。

では女性科学者を増やすためにはどうする?それはまず、理系に進む女性を増やすこと。そして女性研究者が研究を続けられる環境を整えることです。大学や企業内に保育施設を整備し、さらに育児期の研究者の負担を減らすために研究をサポートする支援員(主に大学院・学部生)をつける研究支援員制度を導入することで、女性研究者の負担はとて軽くなります。また支援員になる学生は、「育児をしながら研究もする」というロールモデルを将来の自分と重ね合わせることができ、研究のノウハウを先輩から学ぶこともできるという大きなメリットがありますね。

神戸大学ではすでに、この制度を利用して大きな研究成果を挙げている女性科学者も数人います。将来的には「男性である、女性である」という性差を意識しないで研究や社会生活が営める社会になるといいなと思っています。

これからも女性科学者がたくさん誕生して、たくさん成果を挙げられるよう応援していきたいと思っています。

特集

「研究者」として活躍する女性たち



男女雇用機会均等法の施行以降、社会のさまざまな分野で女性の進出が進んできましたが、それでもまだ研究分野での女性の割合は少ないのが現状です。特に理系分野の女性研究職は非常に少なくなっています。

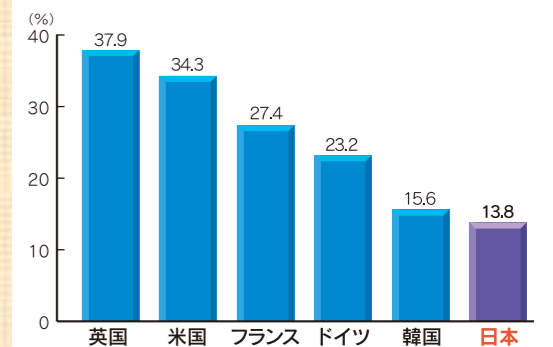
国では、平成18年度から大学等を対象に支援事業をスタートし、女性研究者の育成に取り組んでいます。

今号では鹿児島市で活躍する女性研究者や鹿児島大学の取組を取材し、「研究職で働く女性の今」を紹介します。

全体に占める割合は1割強

主要先進国の中でも、日本の女性研究者数は非常に少ないです。その大きな原因の一つに「研究環境整備の遅れ」が挙げられています。欧米では研究者が研究に専念できるよう、周辺業務に従事するスタッフを配置するなど手厚いサポート体制が整っているケースが多いのに対して、日本では研究者が一人で幾つもの仕事をこなさなければならないことが多く、男女を問わず研究の障害になっています。特に女性は出産・育児などのライフイベント期に研究との両立が困難なことが、女性研究者が育ちにくい要因の一つと考えられます。

主要先進国における女性研究者の割合



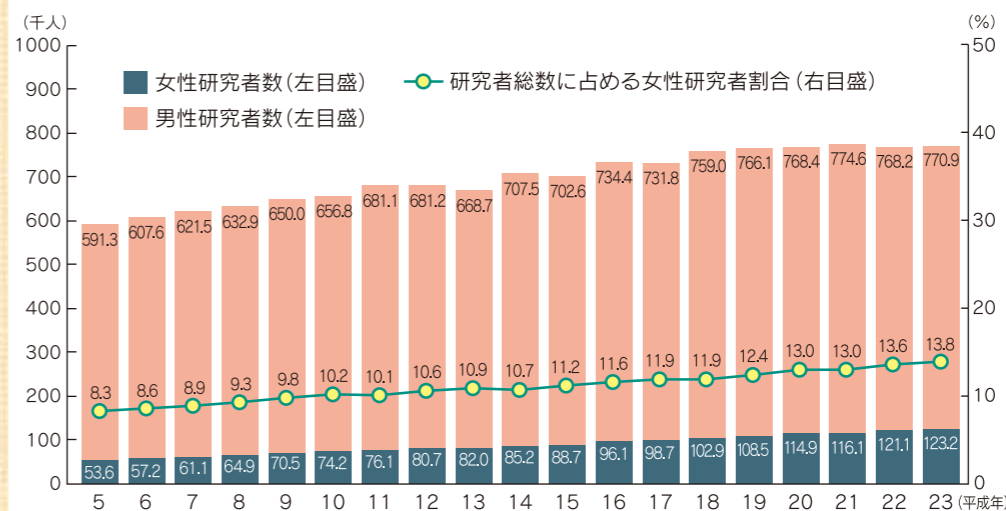
(出典例) 「総務省科学技術研究調査報告」(日本) 平成23年
「NSF Science and Engineering Indicators 2006」(米国)

「理系女子(リケジョ)」の育成

最近よく見聞きする「リケジョ(=理系女子)」…理系に進んだ女性の愛称です。結婚や子育てをしつつ、第一線で活躍する女性の科学者や宇宙飛行士の姿が注目を集めています。しかしまだ、理系学部や研究者における女性の割合はかなり低く、科学技術分野の研究職における女性の割合が約12%、大学教員における女性の割合が約15%、理系学部における女子学生の割合が約20%と、先進各国の中で最低レベルとなっています。

国は第三次男女共同参画基本計画と第4期科学技術基本計画を推進中で、自然科学分野の女性研究者の採用目標として早期に25%を達成し、さらに30%にまで高めることが計画中に明記されています。(平成21年度24.2%)

女性研究者数及び研究者に占める女性割合の推移



まだまだ少数ながら、女性の研究者の数は年々増えています。次ページからは、鹿児島大学で研究職として働く先生方にお話を伺いました。



かごしまのジェンダー博士「幸せの青い鳥」のすてつぷさん